

◆『Intelligence』購読会員の皆さまへ：ニュースレターNo.30（2015年9月号）◆

猛暑の一月に続く長雨の一月の後、久しぶりのさわやかな秋晴れの連休を、皆さまはいかがお過ごしだったでしょうか。さて、『Intelligence』次号16号の投稿原稿の締め切りは、2015年9月末と迫っております。ふるってご投稿下さい。また、20世紀メディア研究会は次回は9月26日に開催致しますが、その次は11月2日に「日中戦争とメディア」をテーマとする国際シンポジウムを共催する予定です。詳細は追ってお知らせしますが、こちらもお出席賜れば幸いです。その後、年内は11月28日、12月26日に研究会を開催予定です。ご愛読の会員の皆さまには、ニュースレターとともに、「Intelligence」会員専用ウェブサイト <http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> また、会員向けブログとあわせてご覧いただければ幸いです。皆さまからのご意見、ご要望をお待ちしております。

【ブログ用エッセイ募集】会員向けブログでのエッセイはすでに三回目まで掲載しておりますが、お楽しみ頂いていますでしょうか。さて、このブログのエッセイの執筆希望者を購読会員の中から募りたいと思います。研究に関する小話やヒント、資料紹介などを会員向けブログに掲載なさりたい方は、原稿をお待ちしております。原稿の長さは千字程度、写真を二葉そえてご提出下さい。詳しいことは、事務局までご連絡下さい。

【第95回20世紀メディア研究会】（7月25日（土）午後2時半～5時45分）

・井原あや（大妻女子大学ほか非常勤講師）：「女性週刊誌のなかの文学―「この人・この愛・この苦悶」（『週刊女性』）における女性表象」は、1967年に『週刊女性』で連載された「この人・この愛・この苦悶」に登場した文学者と、そこに描かれた女性表象をジェンダーの視点から読み解いて、論じて下さいました。

・ダグラス・E・フォード（防衛省防衛研究所 客員研究員）：「太平洋戦争中のアメリカ海軍諜報活動と大日本帝国海軍」US Intelligence and the imperial Japanese Navy during the Pacific War, 1941-45：は、太平洋戦争において米国海軍が日本帝国海軍の戦力に関してどのように質的インテリジェンスを行ったかを、全体的に論じて下さいました。

・青木富貴子（作家・ジャーナリスト）：「新刊『GHQと戦った女 沢田美喜』で発掘した新たな占領史：混血孤児を育てた沢田美喜とGHQとの戦いは現在に何を語るか。」は、ご自身の最新著書で発掘された沢田美喜とポール・ラッシュ、キャノンとの関係などを論じて下さいました。

※ なお、研究会当日に配布されたレジュメは、会員ホームページにアップされています。<http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> をご覧下さい。

●次回の20世紀メディア研究会は、9月26日（土）で、清水篤さん、中生勝美さんがご報告の予定です。その後は、11月2日（月）に国際シンポジウム、11月28日（土）を予定しております。なお、NPO インテリジェンス研究所による諜報研究会は、11月2日（月）の国際シンポジウムの中の午前の第一セッションが共催となります。第一セッションでは、山本武利先生と土屋礼子が報告する予定です。詳細は10月に入ってからHPなどでお知らせ致しますので、ぜひご参加下さい。また、研究会でのご報告御希望の方は、20世紀メディア研究所事務所 [m20th@list.waseda.jp](mailto:m20th@list.waseda.jp) まで、メールにてご一報下さい。

【気になる新著紹介】

倉橋正直『戦争と日本人―日中戦争下の在留日本人の生活』（共栄書房）は、日中戦争下の中国における日本人の生活や活動を述べた書だが、最後の17章、18章は日本軍及び中国軍がまいた伝単のコレクションを翻訳して掲載しているので、研究資料として役立つ。福間良明『「戦跡」の戦後史―せめぎあう遺構とモニュメント』（岩波書店）は、各地の戦跡の歴史を通して、戦争の記憶をめぐる政治を問いかける本。貴志俊彦ほか編『増補改訂・戦争・ラジオ・記憶』（勉誠出版）は、2006年に出版された旧版を増補改訂し、かなり分厚くなったが、その分充実した最新資料が収められており、ラジオ史研究者は必携の書。

【コラム：大統領候補トランプ氏の発言】

今年の七月から八月にかけて、テレビや新聞は戦後七十年記念の特集や特別番組を数多く放送したり、掲載したりした。それらは安保関連法案に対する反対や抗議運動の高まりとともに、戦争をどう語り伝えるか、そして現在とこれからの日米関係を考えさせるものであった。そして、八月下旬に訪れた米国で思わぬところで日米関係に関する発言を聞いた。それは共和党大統領候補として立候補している、実業家のドナルド・トランプ氏が支持者の集会で演説している場面をテレビで何気なく見ている時であった。彼は、日本のために米国の若者が兵士となって血を流しているのに、日本は米国のためには何もしないとはおかしい、という内容の発言を述べ、それに対して聴衆は熱狂的な反応を示していたのである。米国大統領候補の国内向けの演説で、このように「Japan」が話題に出るのは、過去十年以上の記憶ではなかったように思う。トランプ氏はメディアへの露出度が高く、また問題発言も多いので、そのアクの強いキャラクターを皮肉った物まねが流行しているが、こうした俗物の支持層が日本の政治にも影響を与えかねないことに、うそ寒い思いがした。帰国後、世論の懸念をよそに、安保関連法案が参院本会議で成立した。それは9月18日、満州事変の発端となった柳条湖事件が起きた日からちょうど84年目の日であった。

[9月19日付 文責：土屋礼子]